

令和4年度 全国学力・学習状況調査及びすぐすくウォッチの分析

河内長野市立三日市小学校 6年生

学力・学習状況調査及びすぐすくウォッチの概要

国語

設問番号	学校の平均正答率
1一	86.4
1二	72.8
1三	86.4
1四	41.7
2一(1)	66.0
2一(2)	82.5
2二	67.0
2三	57.3
3一	52.4
3二	35.0
3三 ア	70.9
3三 イ	60.2
3三 ウ	57.3
3四	69.9

概要

本校の平均正答率は65%で、全国平均65.6%に対してはわずかに下回っているものの、大阪府平均64%に対しては1%上回っている。全体的に知識及び理解を問われる問題よりも、前後の文から読み取り解答する思考力、判断力、表現力等を問われる問題が多く出題されていた。記述式の問題では、条件に合わせて自分で考えて良さを書いたり、内容をまとめて書いたりするものが題出された。これらの問題に共通して「あなたが〇〇さんなら」という立場で書かせるものになっている。また、解答時間が足りない、全く足りないと回答した児童が47%を超えていた。そのため、大阪府や全国に比べて無解答率が高く、後半になるほどさらに高くなかった。

特に成果が見られた問題例

最初の選択問題においては無回答率が低く、途中まで、もしくは不十分であったとしても、自分なりに書ききる努力をした児童が多かった。**2一(2)**登場人物の相互関係について描写を捉える問題では、全国・大阪府の平均正答率が約70%に対して、本校の正答率は82.5%と大幅に上回っている。登場人物の感情の変化を、叙述をもとにしながら追っていったり、授業中や宿題での音読学習に力を入れてきたりしてきた成果ではないかと思われる。

特に課題が見られた問題例

3三ウの学年別漢字配当表に示されている漢字「したしむ」を文中で正しく使う問題で、全国平均正答率よりも10%下回った。普段あまり使い慣れない言葉であるが、日頃から漢字を学習する際に、決まった読み方でしか覚えていないことが原因の一つとして考えられる。その漢字の持つ意味や色々な使い方にしっかりと触れていくことが大切である。

3四は、「行の中心」ということばの意味をとらえられなかった児童が多かったと思われる。書写の教科書の△マークを結ぶ活動などを取り入れるなど、普段から行の中心を意識させる指導が必要である。

また、記述式の問題は、正答率が大阪府より下回っている。特に条件付きの記述式の問題には弱い傾向があり、文章を読み取って想像したり、文章をわかりやすくまとめて書いたりすることに課題がある。キーワードを使って記述するなどの工夫を授業で実践していく。

算数

設問番号	学校の平均正答率
1(1)	88.3
1(2)	55.3
1(3)	71.8
1(4)	29.1
2(1)	68.9
2(2)	65.0
2(3)	17.5
2(4)	45.6
3(1)	73.8
3(2)	72.8
3(3)	64.1
3(4)	66.0
4(1)	38.8
4(2)	79.6
4(3)	68.0
4(4)	52.4

概要

全国と大阪府の平均正答が同じ10問に対し、本校は9.6問という結果で全国・大阪府の平均とほぼ同じぐらいだということがわかる。正答数の集計値を見ると、本校の中央値を下回る児童が40%を占めている。また、正答数が10問～13問の中間層に40%の児童がいる。

特に成果が見られた問題例

1(1)は、全国的・大阪府的にも正答率が高いが、本校の正答率もかなり高く、88%を上回った。今まで4けた×1けたの基礎計算などを朝学や授業の中で取り組んできた成果だと思われる。

3(2)分類整理されたデータから、全員の希望が1つは通るように遊びを選ぶ問題では、全国・大阪府の正答率よりも約9%高かった。無回答率も低かったことから、普段の学級活動での話合いなどの生活経験を基に問題を読み、情報を分析して問われている意味をしっかりと理解できたことがわかる。

特に課題が見られた問題例

1(2)14と21の最小公倍数を求める問題では、本校の正答率が55.3%と半数はできているが、全国や大阪府と比べると、全国とは16.9%差、大阪府と比べても15.8%差となり、差が大きい。誤答例を見ると、最小公倍数を求めるのではなく、最大公約数の7としている児童の割合が、17%と高かった。算数用語の意味を理解していない児童もいるため、朝学や授業の振り返りなどで復習していく。

1(4)ウ「85を大きくみて90、21を小さくみて20として計算する」を選んだ児童が64.1%いたことから、かい数にして計算する際に無条件に四捨五入して計算することが念頭にあり、85を80にしないと問題の条件に合わず証明できないということが判断できていない。どのように数を処理するかという算数の見方・考え方の力を授業で付けることを大切にしていく。

4(1)プログラミング的思考を問う問題で、正答率は全国より10%下回っている。正三角形の性質を理解していること、そしてプログラムをイメージする力が乏しい。また(3)(4)の問題は、他の領域に比べ图形の領域での無回答率が10%以上と高くなっている。最後の2問なので、時間がなかった児童もいたかもしれないが、图形をイメージしたり、順序立てて考えたりすることに課題があるように思われる。

また、2(3)のような割合の問題も全国平均同様正答率が低い。今後も授業において生活に基づいて想像させるために具体物を用いて考えたり、学習の見通しを示したりすることを大切にしていく。

理科

設問番号	学校の平均正答率
1(1)	94.2
1(2)	60.2
1(3)	61.2
1(4)	71.8
1(5)	63.1
2(1)	67.0
2(2)	71.8
2(3)	58.3
2(4)	34.0
3(1)	35.0
3(2)	70.9
3(3)	72.8
3(4)	34.0
4(1)	88.3
4(2)	62.1
4(3)	42.7
4(4)	60.2

概要

知識を問うような単純な問題は少なく、身の回りの生活の中から課題を見つけ、理科と関連づけながら思考し、答えを導いていく内容の問題が多かった。問題文を読み、その内容に当てはまる答えの部分、当てはまらない答えの部分を判断し、取捨選択していく力が必要とされている。結果としては大阪府の平均より少し高く、ほぼ全国の平均に近い値になっている。実験の経験がある問題の正答率は高く、また教科書には載っていないような（普通は実験しないような）問題の正答率は低い。また、結果と考察を結び付けて考える問題でも正答率が低く、無回答率が高かった。

特に成果が見られた問題例

「エネルギー」を柱とする領域、「地球」を柱とする領域では、大阪府・全国の正答率を上回っている。一日の気温の変化を表に表したり、そこから一日の気温の変化の特徴を考えたりした経験が、解答に活かされていた。器具の使い方も使っているからこそ問題として出てきたときに答えられると考えられる。

特に課題が見られた問題例

大阪府・全国の正答率と比べると、記述式正答率のポイントが2~8%ほど低い。しかし無解答率は低く、課題に取り組もうとする意欲は伺える。主語を明確に把握できていない誤解答が多く、問題文から主語を見つけ、記述として書き表す練習が必要である。

器具や用具の名前を答える正答率は高いものの、「メシリンダー」の名称を答える問題の無回答率が15.5%と非常に高かった。この問題は単元後のテストでも定着が弱かったところである。なじみのないカタカナ用語はなかなか定着しにくい傾向がみられるため、対策の一つとして、理科室にある用具の名前が分かるような視覚的支援を考えていく。

また、結果から問題を発見したり、まとめの根拠を実験の結果を基に記述するような、結果と考察を結び付けたり、新たな問題を解決するためにどのような実験をすればいいのか考えたりする問題では、正答率とともに、無解答率も高かった。これらは、日々の実験活動が、思考力をともなった実験ではなく、教師に指導されて受動的に実験をしたり、結果をまとめたりした結果だと考えられる。のことより、1年生の生活科から「〇〇になったのはどうしてかな?」「それをたしかめるためには、どうしたらたしかめられそうかな?」といった思考を伴った活動をしていくなど、子どもが主体的となり、思考力を伴った実験や考察を実際に行わせる重要性が明らかとなったため、これからも意識して実践していく。

すくすくウォッチ（教科横断的な問題わくわく問題）

観点別	学校の平均正答率
A図や表、グラフ、短い文章、会話文等の内容を関連付けて、正しくとらえる。	58.3
B図や表、グラフ、短い文章、会話文等の内容を関連付けて、それをもとに論理的に考える。	81.8
C図や表、グラフ、短い文章、会話文等の内容を関連付けて、それをもとに新たな課題を考える。	86.9
D図や表、グラフ、短い文章、会話文等の内容を関連付けて、それをもとに自分の考えをまとめ、伝える。	80.4
E興味関心のある事がらについて、意欲的に工夫して相手に伝える。	94.4

概要

条件を理解した上で、整理して考察しなければ解答できない問題や、問い合わせの条件に沿って記述して解答しなければならない問題であり、普段から論理的に思考するトレーニングを積んでいない児童にとっては、難易度の高い問題であったと考えられる。

特に成果が見られた問題例

会話から問題を読み取るような自由度の高い記述式の問題の正答率は、大阪府の平均と比べて8%高かった。また、校内の結果でも前年度と比べ0.9%高くなっている。児童アンケートでの「学級会では、少数意見も大切にしている」「自分たちで意見を出し合って物事を決めている」といった項目においても、あてはまるご回答している児童が大阪府と比べて大きく上回る結果となっている。日頃の話し合い活動が結果に結びついているように思われる。記述問題においても平均正答率が高く、問題の意図を読み取り、聞かれたことに対して的確に答えられていることがわかる。

特に課題が見られた問題例

指定された言葉を用いて記述する問題の正答率が低かった。また、資料の読み取りやグラフの読み取りの言葉を正確に理解することが難しく、正答率が低かった。どの活動においても自力解決をすることを大切に、考えたことをもとに他者と交流し、わかったことを振り返り自分にフィードバックできるような活動をふんだんに取り入れていくことが必要である。

学力・学習状況調査及びすぐすくウォッチの概要

児童アンケート

特に成果が見られたアンケート項目例

【すぐすく3】「あなたの学級は、友だちのよいところを互いに認め合える」【33】「話合いをするとき、友だちの意見を最後まで聞いている」**学調18**「友達と協力するのは楽しいと思いますか」という、他者との関わり方を問う項目では、肯定的な回答の割合が大阪府の平均よりも上回っている。他者を認めたり協力したりすることができると考えている児童が多いことがわかる。委員会ではリーダーとして、5年生と協力して活動してきている。縦割り活動でも、6年生が主体となり、ゲームの企画を立てている。また、企画を実施した後に反省会をし、次の活動につなげている。このように、学校全体に関わる活動を、みんなで話し合いながら進めることで、他者と協力することや認め合うことの大切さに気が付いていると感じる。

特に課題が見られたアンケート項目例

【すぐすく62】「家の人に褒められることがある」【63】「家の人と一緒に、遊んだり、勉強したり、家の仕事をしたりすることがある」【66】「家の中に決まった勉強場所がある」という家庭に関する3つの項目の数値が、昨年度の結果や府平均を下回る結果となった。6年生ともなると自立心も芽生えているため、関わり方もこれまでよりも距離をとったものに変化してくると思われるが、ともに子どもたちの成長を見守るためにも、これからも家庭と協力していきたい。

結果を受けて

《学校が重点的に取り組んでいくこと》

«国語»

- ・日記やノート等を書く際、積極的に既習の漢字を使用するよう指導する。
- ・普段の漢字の学習から、漢字を使った短作文などを使用し、意味を考えながら読み、書く指導をする。
- ・読書の時間等を利用し、長文を読み、文章構成に慣れ親しませる。
- ・文章の中のキーワードやキーセンテンスを見つける指導をする。

«算数»

- ・文章から必要な情報を読み取り、簡単な図や絵でかけるようにイメージ化する指導をする。
- ・何分間、何分前、何分後などの用語を、日常生活の中で使用し、時間の感覚をつかめるようにする。
- ・面積の公式のように多数種類があるものを覚えるため、日頃から公式の必要な問題に触れるようになる。
- ・情報を取捨選択していくことができるよう、情報過多の問題に慣れるよう指導する。

《理科》

- ・理科の実験器具、用具の名前を指導者側がしっかりと呼称することや黒板等に記述することで、定着の支援をする。
- ・観察や実験の結果から、具体的な数値をだすなど根拠をわかりやすく表す場面を設定した指導をする。
- ・自分と周りの気付きの違いを捉え、違いを見いだす場面を設定した指導をする。
- ・習得した知識をより深く理解できるよう、習得した知識を使って日常生活に活かせるよう指導する。

《児童のみなさんに取り組んでほしいこと》

- ・問題を解くために、最後まで続ける努力、何かを書こうとする努力を続けてほしい。
- ・授業を大切にし、めあてを持って取り組んでほしい。
- ・習った漢字を忘れないよう繰り返し練習をする。文章を読むときに、漢字の意味を考えながら読むようにする。文章を書くときに、習った漢字を積極的に使うようにする。
- ・初見の文章をすらすら読み、内容を読み取ることができるよう、日々の音読を大切にする。
- ・日常生活の中で、たす、ひく、かける、わるを使っていることを意識する。
- ・日常生活の中にあるたくさんの情報から、必要な情報を選びだし活用する力をつける。

《保護者のみなさまに協力してほしいこと》

- ・今回の調査では「携帯電話・スマートフォンやコンピュータの使い方について、家人の人と約束をしたことを守っていますか」の項目で、家人の人と約束を“守っている”と答えた子どもが約60%でした。現在、ネット等によるトラブルは増加傾向にあります。また、携帯電話・スマートフォンやコンピュータ、ゲーム機等を長時間使用する子どもは、正答率が低い傾向にあります。そして、保護者からの見た目と実際の子どもたちの様子との違いも見えています。携帯電話・スマートフォンやコンピュータ、ゲーム機等の使用について改めてお子さまと確認をしてください。
- ・情報を整理する力が高ければ高いほど、正答率も高い傾向にあります。日常生活の中にあるたくさんの情報の中から、本当に必要な情報を見つけられるよう、社会の諸問題について考えるきっかけを作っていただければありがたいです。